

氏名・(本籍)	と 富山	やま	すずむ 奏	(三重県)
学位の種類	文学博士			
学位記番号	乙第9号			
学位授与の日付	昭和46年11月17日			
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当			
学位論文題目	伊賀蕉門の研究と資料			
論文審査委員	(主査)教授多屋頼俊			
	(副査)教授山本唯一教授五來重			

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨

本書は、芭風俳諧研究の一環として、専ら伊賀の蕉門を歴史的に研究し、併せて伊賀蕉門の重要な文献を複刻したものである。芭蕉は伊賀に居た頃には貞徳流の俳諧を嗜んでいたが、江戸へ出て談林風を取り入れ、次いで貞門談林を止揚して芭風を樹立し、更に進んで「軽み」を最高理想とする芸術境を開拓した。この芭蕉自身に於いて進展した俳諧を、伊賀の蕉門はいかに受容したか、ということが本研究の中心課題である。

さて、本書は、本文八章、附録一章から成る。第一・二章は伊賀蕉門の歴史を概観する。芭蕉は、始め主君藤堂蟬吟の関係で貞門に属していた。寛文五年の『貞徳翁十三回忌追善俳諧』には、蟬吟が発句、季吟が脇、以下正好・一笑・一以・宗房(芭蕉)の順に百韻を巻いており、同七年、湖春の続山の井には蟬吟の29句に次いで、宗房は28句入集し、伊賀の俳人として早くも頭角を露わしている。江戸へ出て二年余、延宝三年五月、宗因歓迎の百韻に連衆として加わり、翌年素堂と二百韻を興行し、新進の俳人として注目せられるようになった。然し同年六月帰郷した時には、伊賀の俳人からは殆んど黙殺せられた如き形で、僅に市隠・半残の宅に招かれて俳諧を共にしたに過ぎなかった。蓋し伊賀の俳諧は旧態依然たる貞門であったために、若き芭蕉を異端視したようである。但し上記の半残は、その後永く芭蕉に師事し、やがて伊賀蕉門の重鎮になったのであった。『野ざらし紀行』の旅では貞享元年の九月に数日と、同年末から翌年二月までと二回郷里に滞在した。伊賀の俳人との交渉は依然として稀薄であったが、この間に於いて注意すべきことが二つある。一は貞享二年正月廿八日付で、半残に宛てて長い消息を送っていることである。その消息には、半残の句に対して懇切丁寧な批評を加えており、門人に対する愛情の溢れたものである。もう一つは、郷里を立って、奈良へ向った芭蕉の後を追いかけて来た土芳と江州水口において出会ったことである。土芳は年少の頃から芭蕉を師として仰いでいた

が、当時、藩命によって播州へ行っており、帰国して芭蕉のことを知り、後を追うて来たのであるが、水口における芭蕉との対面はやがて土芳が生涯を俳諧にささげる契機になったのであった。

芭蕉は、次いで貞享四年の暮に帰国し、翌年三月中旬まで滞在した。“簾の小文”や土芳の“芭蕉翁全伝”その他に依れば芭蕉は、自作の“徒歩ならは杖突坂を落馬哉”について、半残と土芳に脇を競作させ、李丸を加えて第三以下を統けて歌仙一巻を巻き、旧主蟬吟の息の探丸の別墅の花見に招かれて、探丸と唱和し、或は良品・松風夫妻に招かれて歓待せられるなど、貞享二年の時とは一変して、一流の大家として厚遇せられている。土芳が俳諧一筋に生きようと決意して、致仕して庵に籠ったのは貞享五年三月のこと、芭蕉は“蓑虫の音を聞きに来よ草の庵”的句を贈り、土芳はこれによって庵を“蓑虫庵”と号した。当時、伊賀において蕉門に連っていたのは、半残・土芳を始として、風麦・良品・苔鮮・探丸等、主として藤堂家に仕える武士であって、伊賀の蕉門は先ず武士階級によって形成せられたのであった。

元禄二年秋九月、芭蕉は“奥の細道”的旅を終えて郷里へ立ち寄ると、忽ち大歓迎を受けて、風麦・良品・半残・土芳等々の家へ招かれて、歌仙・五十韻等を興行した。伊賀の俳壇は明かに蕉風が主流を占めるに至った。さてここで注意せられることは、貞享の末頃から町人が続々と入門し、伊賀蕉門の基盤が武士から町人へ移ろうとする如き傾向を示したことである。猿雖・卓袋・宗七・宗無・氷園等々はその頃蕉門に入った商人である。これは芭蕉が新しい俳諧を広めようとするのに当り、古風な俳諧的教養を身につけた者よりも、初心者を歓迎したことと関係があるようである。

元禄四年に刊行せられた“猿蓑”は芭蕉七部集の中で最も重視せられるものであるが、伊賀の蕉門では、半残8句、土芳6句、探丸5句、風麦3句、猿雖2句、1句ずつ入集している者は二十余名に及び、伊賀蕉門の最盛期を現出した。次いで元禄七年に撰んだ“続猿蓑”には半残は僅に1句、風麦は3句入っているのに対し、猿雖7句、万乎7句、雪芝5句、望翠4句など、町人の方が遙に有勢である。但し土芳は8句入集しているのが注目せられる。これは芭蕉晩年の伊賀蕉門の大勢を端的に示しているものと言うことができよう。芭蕉は前記“奥の細道”的旅の後に立ち寄ったが、その後、元禄三年の春、同年冬、翌年春、元禄七年の夏と秋等、度々帰郷して門人を指導し、門人等も芭蕉を尊敬していたが、古参の武家の門人は、芭蕉の新しい主張“軽み”に親しむことができず、町人の門人はなお十分に“軽み”的世界へ参入することができない状態であった。

次に第三章“服部土芳の系譜”は、土芳の生家である木津家の旧記、系図及び菩提寺である西蓮寺の過去帳等を丹念に調査した結果を詳記し、第四章“服部土芳の生涯”は、土芳の句日記“蓑虫庵集”によって、土芳の俳諧活動を年次を追うて検討し、元禄十五年から宝永五年（土芳52才～61才）までが最も盛であったことを指摘し、次に有名な“三冊子”的編集年代を考証する——従来は元禄十五年～宝永元年の三年間と言っていたのを、著者は“蓑虫庵集”的記述、土芳自身及び猿雖の経験から、“三冊子”的成立は元禄十五年頃と推断する。“三冊子”は芭蕉の俳諧を見るための根本資料であるが、その編集年次を確実な資料によって限定したことは注目すべきである。次に“蕉翁句集”“蕉翁文

集” “奥の細道” の整理・編成について、 “蓑虫庵集” の宝永六年十月の頃に “先師の詠草を集て其句三巻，是を廿五日亡師に備へて香焼て拝す「探れとも暗さはくらしむめ椿」此書手向曉，夢に師にまゆみ……” とあるのを指摘する。土芳は俳人として、芭蕉のような天分には恵まれなかつたが、生涯、芭蕉を尊敬し、芭蕉の全業績を集録したのであって、その功は不朽である。

第五章 “蓑虫庵集の成立過程” は “蓑虫庵集” と “庵日記” “小学”との関係を詳細綿密に考証し、 “蓑虫庵集” を忠実に翻刻し、所収の句947句に一連番号をつけ、人名索引と発句索引とを添えてある。これは土芳を中心として、伊賀蕉門を調べるための第一資料である。なお “小学” の全文を写真で掲載してある。貴重な資料である。

第六章 “三冊子の諸伝本と芭蕉翁記念館本三冊子” は、三冊子の伝本に(1)土芳自筆本から二伝の石馬本と、(2)猿雖の本から三伝の本とがあり、外に(3)闌更が安永五年に刊行した本があるが、いずれも本文に誤脱と考えられる所がある。芭蕉翁記念館所蔵の三冊子は猿雖系の本と考えられるが、安永八年またはそれ以前のものと認められ、本文は現存諸本の中で最も正しいと考えられると言つて、実例を挙げて証明する。次にこの記念館本を、厳密に翻刻している。

第七章 “蕉翁句集と蕉翁句集草稿” は、終戦直後、土芳自筆の蕉翁句集の草稿十八葉が初めて学界に報告せられたが、その後、同書の断簡九葉が芭蕉翁記念館の所蔵となった。著者はこの九葉を考証して、八葉は草稿、一葉は完成稿であることを明かにし、全九葉を写真版で掲載し、活字にも写し、更に柿衛文庫の “蕉翁句集” を翻刻して草稿と比較し、蕉翁句集の成立過程を考証している。なお “蕉翁句集” の 553 句の索引を添えてある。

第八章 “木の葉集と智周発句集” は、昭和37年に発見せられた “智周発句集” について考証し、その全文を翻刻したものである。智周は、その父、夫とともに芭蕉に師事した人で、その句集は伊賀の蕉門を研究する場合に、注意すべき一資料である。なおこの句集を、従来 “木の葉集” と呼んでいたのは誤りである事を指摘している。なお附章 “伊賀餞別と句餞別” は伊賀餞別と句餞別との書誌的研究であるが、伊賀蕉門の研究と直接的な関係はないから此處には省筆する。

以上、略記したように、本書は、確実な資料に依って、先ず伊賀の蕉門の成立・展開を明らかにし、第二に、伊賀蕉門の中心であった服部土芳について、家系・生涯・業績を考究し、第三に(1)土芳の句日記 “蓑虫庵集”，(2)土芳が心血を注いで編集した “三冊子” と “蕉翁句集” について書誌学的に綿密に研究して、その本文を翻刻し、索引を添えた。(3)なお、伊賀蕉門の女性智周の句集を研究して、その全文を翻刻したものである。蕉風俳諧の研究において、伊賀の蕉門の研究は極めて重要な意義を有するものであるが、著者は本研究において、“伊賀” という地域的限定をきびしく守って、他地方の蕉門との関係に立ち入ることを、ことさらに避けたために、ややものたらぬものが感ぜられる。しかしこの点については、著者は稿を改めて研究を進められる予定を持っておられるのであろう。従来、伊賀の蕉門については、殆んど郷土史家に委ねられていたが、本研究は極めて確実な手法を以って、伊賀の蕉門を基礎的に研究して、蕉風俳諧研究のために貴重な隕石を設定せられたものであつて、当然、文学博士の学位を授与すべき研究であると認める。以上